

Hara Museum of Contemporary Art

ハラドキュメンツ 10 佐藤雅晴—東京尾行

2016年1月23日 [土] - 5月8日 [日] 原美術館 [東京・品川]



《図版1》 「東京尾行」 12チャンネルビデオ、2015-2016年 ※本展メインビジュアル

【展覧会概要】

原美術館がキュレーターの育成や若手作家の支援を目的に開催する不定期のプロジェクト、「ハラドキュメンツ」の第10弾として「佐藤雅晴—東京尾行」展を開催します。

佐藤雅晴(さとう まさはる、1973年、大分県生まれ)は、パソコンソフトのペンツールを用いて実写をトレースしたアニメーション作品に取り組んでいます。佐藤にとってトレースとは、対象を「自分の中に取り込む」ことだといいます。それは、自身の暮らす土地や目の前の光景への理解を深め、関係を結ぶ行為とも言えるでしょう。一方、佐藤の作品を見る私たちは、実写とのわずかな差異から生じる違和感や、現実と非現実を行き来するような知覚のゆらぎをおぼえます。人それぞれに多様な感情や感覚を呼び起こす佐藤の作品は、見ることや認識することの奥深さと豊かさを教えてくれます。今回は、佐藤が作家として日本で注目されるきっかけとなったアニメーション作品、『Calling』(ドイツ編、2009-2010年)を始め、「トレースとは尾行である」という新たな発想の下、2020年のオリンピック・パラリンピックに向けて変わり行く東京の今を描いた最新のアニメーション作品『東京尾行』(2015-2016年)、さらに平面作品数点を加え、作家の表現の変遷を展観します。

【見どころ】

- * 近作3点、12の映像で構成される新作1点、および平面作品数点により佐藤雅晴の表現の変遷を展観
- * 日本で注目されるきっかけとなった『Calling』のドイツ編(2009-2010年)と日本編(2014年)を同時展示
- * トレース=尾行という発想の下、新たな挑戦をする最新のアニメーション作品『東京尾行』の展示

【展覧会詳細】

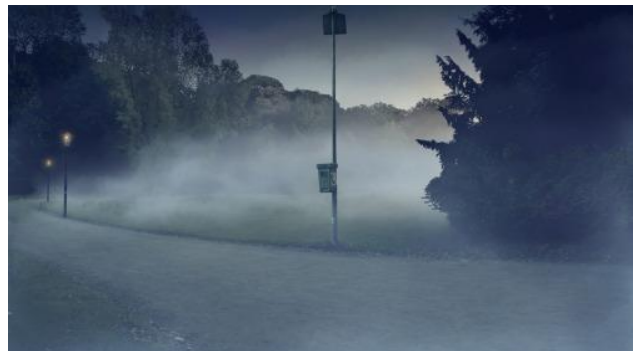
—— 他者のあとをつけること、自分と他者を置き換えること、互いの人生、情熱、意志を交換すること、
他者の場所と立場に身を置くこと、それは人間が人間にとってついに一個の目的となりうる、おそらく唯
一の道ではないか —— ジャン ボードリヤール ^{*1}

佐藤雅晴は、東京芸術大学油画学科に学んだ作家です。しかし、同大大学院修士課程時代を含め、在学中は絵画制作に意味を見出せず、一切描くことがなかったといいます。当時、コンセプチュアルアートやインスタレーションに傾倒していた彼は、やがて日本での制作に行き詰まり渡独。以後 10 年にも及ぶドイツでの生活の中で辿りついたのが独自の手法によるアニメーションの制作です。

佐藤のアニメーションは、実写映像を忠実にトレースする(写し取る・なぞる)ことによって作られます。身近な人々や身の周りの風景をビデオカメラで撮影し、パソコンソフトのペイントツールを用いて、「何かを強調することも、筆跡等を残すこともしないで、なるべく撮ったものに近づけるように」^{*2} 一筆一筆“描いて”いきます。油彩画を一枚完成させる以上の膨大な時間と労力を費やし、カメラの目が捉えた日常をただただトレースし、何百ものコマを作って仕上げたアニメーション——この無意味とも思える作業の果てに微かに現れる実写との差異が佐藤作品を特別なものになっています。

彼の作品の前では誰もが一瞬戸惑いの表情を見せますが、それは普通の風景かと思われた映像に違和感を覚え、落ち着きどころを求めて目も心も揺れ動くためです。その違和感から佐藤の作品に、孤独や不安を見る人、ディストピア^{*3}や私たちが生きるこの世の平行ワールドが現前していると捉える人もいれば、ノスタルジーを感じたり、ユーモアを見出したりする人もいますなど、作品の解釈は実に様々です。解釈の多様さは、日常そのものもつ複雑さや多義性の表れとも言えるかもしれません。本展では佐藤のそのような作品群から、まずはトレースを極め、彼が日本で注目されるに至った『Calling』(ドイツ編、2009-2010 年)をご覧ください。

『Calling』(ドイツ編、日本編)



左から《図版 2》《3》 「Calling(ドイツ編)」アニメーション、ループ(7分)、シングルチャンネルビデオ、2009-2010年

佐藤は、実写をトレースする行為について、対象を自分の中に取り込む儀式のようなもの、と説明していますが、それは画家が名画を微細なタッチまで模写することでその制作を追体験し、作品の本質に辿り着こうとする行為と似ているかもしれません。『Calling』のドイツ編(2009-2010年)では、10年もの歳月をデュッセルドルフで過ごしながらも居場所を見出せないでいた彼が、12の身近な光景を時間の移ろいも交えて精緻にトレースすることで、その土地を理解し、関係を密に結ぼうとしていた様子が窺えます。唐突に鳴り出す電話の着信音には、異国でのコミュニケーションの不成立、繋がらないことで高まる佐藤の孤独や不安が表れているとともに、閉塞感や状況を打開する微かな希望も感じられます。



左から《図版 4》《5》 「Calling(日本編)」 アニメーション、ループ(7分)、シングルチャンネル ビデオ、2014年

一方、『Calling』の日本編(2014年)は、ニューヨークで開催された「Duality of Existence - Post Fukushima」展(2014年、Friedman Benda Gallery)の出品作。ドイツから日本に帰国した直後に遭った東日本大震災、そして間もなく自身と家族を続けざまに襲った病魔との闘いなどを経て生まれた作品です。ドイツ編と同じく作家の暮らす街の日常をトレースしたものでありながら、また同様に電話の着信音が鳴り続ける状況でありながら、ここでは作家の視線は自身の内のみならず外の世界へも広がり、人の消えた街、見捨てられた街の不安や孤独が表れています。

最新作『東京尾行』

—— 両者にとってそれは自らの固有の存在の解消であり、主体としての場所を保持するという耐え難い務めの解消なのだ —— ジャン ボードリヤール *4



上段左から《図版 6》《7》、下段左から《図版 8》《9》 「東京尾行」 12チャンネル ビデオ、2015-2016年

佐藤の友人でグラフィックデザイナーの杉原洲志は、彼のトレースを「尾行のようだ」と表現しています*5。佐藤はこの言葉で、これまで自分がトレースに拠ってきた理由に気付いたといいます。尾行とは、相手に気付かれることなく後をつけること、ですが、相手の時間・空間・意思を一時共有することであると同時に自身の時間・空間・意思を相手に委ねる行

為でもあります。つまり佐藤にとってトレースとは、対象を自身の中に取り込む行為であるとともに、自身の主体性から解放される行為でもありました。これにより、長年距離を置いていた“描くこと”に抵抗なく回帰することができ、作品制作に戻ってくることができたのです。

そしてこの度、本展出品作として、トレース＝尾行という新たな認識の下、最新作『東京尾行』の制作を始めました。本作は彼が2015年、東京中を歩き回り撮影した映像を基にしたアニメーションです。佐藤は、国会議事堂、工事現場の油圧ショベル、歩道橋を渡る人、アイスクリーム、路地裏の猫など、東京の象徴的な場所や何気ない光景や気配を尾行し、対象に導かれるままに東京を体感しています。

これまでと異なるのは、本作でトレースされているのが実写映像の一部分であること。部分的にアニメーションとなることで、全体がそうであった時には意識されなかったこと——アニメーションの層の下に実写の層が存在し、映像が虚実一体であること——が明らかにされています。しかも、虚であるはずのアニメーション部分には、実は別の魂(アニマ)が宿り、実よりもリアルであるかのように見え、我々が目にするものの虚実の曖昧さを問いかげながら、虚の可能性も示します。

東京は今、至る所で耐震補強工事が続けられ、また、5年後の東京オリンピック・パラリンピックに向けて街が大きく動きつつあります。半世紀前の東京オリンピック時がそうであったように、もしかすると今回も景観だけでなく、日本の社会システムや日本人の価値観・習慣・人格までもが大きく変化するのかもしれませんが。そのような東京の今をトレース＝尾行した佐藤の作品は、見る人それぞれに、未来への希望や期待、恐れや不安など複雑な感情・感覚を呼び起こしつつ、多くの未知のものが形となる予感を感じさせてくれることでしょう。

なお、本展では、佐藤の平面作品も出品される予定です。「複写された対象をトレースして、再び描くという行為を用いて複写する」*6——写真と絵画の中間的な構造で表現することで、複製の時代における作品のあり方、アウラ*7の在り処を探ります。

*1 ジャン ボードリヤール「プリーズ・フォロー・ミー」、ソフィ カル『本当の話』、p. 189、1999年、平凡社

*2 杉原洲志ブログ <http://artbookwho.com/modules/wordpress/index.php?p=68>

*3 デイスとピアとはユートピアと反対の社会。主にSFなどで描かれる、自由が制限され、思想や価値観が強制される超管理社会を指す。

*4 ジャン ボードリヤール、前掲書、p. 189

*5 杉原洲志ブログ、前掲

*6 「佐藤雅晴 1 x 1 = 1」展(2015年4月18日-5月23日、イムラアートギャラリー)パンフレットより

*7 ヴァルター ベンヤミンが『複製技術時代の芸術作品』等の著作において定義した概念。複製芸術ではない芸術のもつ崇高さ、一回性を意味する。

【佐藤雅晴 プロフィール】

1973年、大分県生まれ。1999年、東京芸術大学大学院修士課程修了。2000-2002年、国立デュッセルドルフクンストアカデミーにガストシュラー(研究生)として在籍。2009年、「第12回岡本太郎現代芸術賞」にて特別賞を受賞。以後、川崎市市民ミュージアム(2013年、神奈川)やギャラリーαM(2014年、東京)等で個展開催。また、「No Man's Land」展(2010年、フランス大使館旧庁舎、東京)や「Duality of Existence - Post Fukushima」(2014年、Friedman Benda、ニューヨーク)、「日常／オフレコ」(2014年、KAAT 神奈川芸術劇場、横浜)等、国内外のグループ展に意欲的に参加している。現在、茨城県取手市在住。Web site: <http://masaharu-sato.tumblr.com/>

【ハラ ドキュメンツとは】

ハラ ドキュメンツとは、原美術館がキュレーターの育成や若手作家の支援を目的に開催する不定期のプロジェクト。原美術館賛助会員のサポートの下、1992年の福田美蘭に始まり2012年の安藤正子まで、これまでに9回開催している。美術の範疇に留まらず、着せ替え人形作家の真鍋奈見江など、次代を担う若手の創作を紹介している。



《図版 10》 「バイバイ カモン」 アニメーション、ループ、シングルチャンネル ビデオ、2010 年

【開催要項】

展覧会名	ハラドキュメンツ10 佐藤雅晴—東京尾行 英題 <i>Hara Documents 10 Masaharu Sato: Tokyo Trace</i>
会期	2016 年 1 月 23 日[土]— 5 月 8 日[日] 開館日数:92 日
会場	原美術館 ギャラリーI、II 東京都品川区北品川4-7-25 〒140-0001 Tel 03-3445-0651(代表) Fax 03-3473-0104(代表) E-mail info@haramuseum.or.jp ウェブサイト http://www.haramuseum.or.jp 携帯サイト http://mobile.haramuseum.or.jp ブログ http://www.art-it.asia/u/HaraMuseum Twitter http://twitter.com/haramuseum
主催	原美術館
協賛	原美術館賛助会員
協力	イムラアートギャラリー
開館時間	11:00 am - 5:00 pm (祝日を除く水曜日は8:00 pmまで/入館は閉館時刻の30分前まで)
休館日	月曜日(祝日にあたる3月21日は開館)、3月22日
入館料	一般1,100円、大高生700円、小中生500円/原美術館メンバーは無料、学期中の土曜日は小中高生の入館無料/20名以上の団体は1人100円引
交通案内	JR「品川駅」高輪口より徒歩 15 分/タクシー5 分/都営バス「反 96」系統「御殿山」停留所下車、徒歩 3 分/京急線「北品川駅」より徒歩 8 分
関連イベント	「Meet the Artist 佐藤雅晴」を開催予定。後日、原美術館ウェブサイトにて告知。

* 会期中、原美術館ギャラリーIII、IV、V にて「原美術館コレクション展:トレース」を併催。「ハラドキュメンツ 10」に出品する佐藤雅晴の制作技法・トレースにちなみ、他人の苦しみをなぞることで自分の苦しみを相対化していくソフィ カルの『限局性激痛』(第 2 部)や、名画の登場人物や現代のアイコン的な人物に扮することで“模写”する森村泰昌の作品等を展覧します。

* 日曜・祝日には当館学芸員によるギャラリーガイドを行ないません。(2:30pmより 30 分程度)

* 会期中、インスタレーションビューを含む展覧会パンフレットの発行を予定しています。発行予定は後日、原美術館ウェブサイトにて告知。

【広報用図版】

ご希望の図版番号を下記、広報担当宛までお申し付けください。1 点のみご掲載の場合は、メインビジュアルの図版 1 をお使いください。また、掲載時にはクレジットの記載をお願いいたします。図版のトリミング、文字載せ等をご遠慮ください。

取材・図版提供などのお問い合わせ先: 原美術館 広報 松浦、野田 (担当学芸員 坪内) Tel 03-3280-0679
Fax 03-5791-7630 E-mail press@haramuseum.or.jp (いずれも広報直通/掲載時には代表番号・アドレスをお用いください)